

# 英語の叙述語句の位置づけをめぐる

小 倉 敏 博

新しい理論の光をあてると、かつて論じられていたなじみの現象が、また再び違った色彩をはなつて浮び上つてくるものである。伝統文法においても論議的であったが、最近の生成文法理論において、またある意味合いから盛んに取り上げられているものとして、(1)のような叙述語句(いわゆる目的格補語、主格補語)を含む構文を挙げる事ができる。

(1) a. I consider John competent.

b. John seems competent.

この構文の分析は、句構造とは何か、節とは何か、主語―述語関係はどのようにとらえられるか、など様々な問題を提起するので、最近のいくつかの分析を参考にして英語の叙述語句の取り扱いに関する問題点の整理をして

みようとするのが、この小論の目的である。

## 一

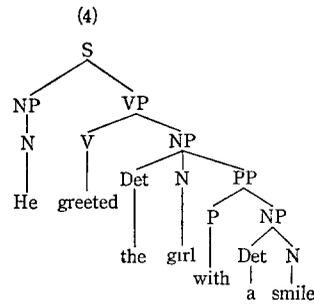
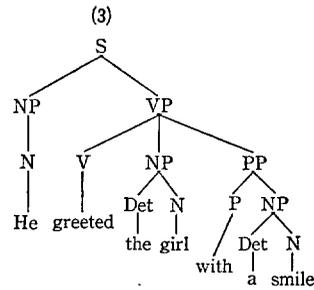
文は、ただ単に形態素(単語)の連鎖ではなく、いくつかの形態素がまとまり、構成素(句)を形成し、階層的構造をしていると考えられている。このような句構造を考へることによって、(2)のような文の多義性がうまく説明できることは周知の通りである。<sup>(1)</sup>

(2) He greeted the girl with a smile.

a. 彼はほほえんで少女を迎えた。

b. 彼は笑みをたたえた少女を迎えた。

この二つの意味に対応して(3)、(4)の句構造標識が考えられる。



生成文法ではこの二つの句構造標識は次のような句構造規則で生成される。

(5) a. S → NP VP

b. NP → (Det) N (PP)

c. VP → V (NP) (PP)

d. PP → P NP

(S = 文、NP = 名詞句、VP = 動詞句、PP = 前置詞句、N = 名詞、V = 動詞、P = 前置詞、Det = 限定詞、( ) は任意選択を表す)

このような観点から構文分析を進めると、階層関係が

な文を考慮に入れる。

(6) I said he would pass the exam, and passed it he has.

(7) John bought the tape and studied French.

やっかいなのは、このような直接的な統語論上の根拠が見出せないのだが、意味の点から考えると一単位と考えられるような場合である。構成素とは結局意味のまとまりを表わしているとも言えるから、意味にまとまりがあれば構成素と認定して処理すべきか迷うことになる。形式と意味の対応関係の記述が文法理論の大きな課題で

どのようになっているのか、また関与している構成素にどのような統語範疇を与えるのかを確定することが困難な場合に遭遇することがある。そこで構成素を決定する根拠が問題となる。構造言語学の直接構成素分析では、何か別の単位で置き換えることが可能であるかなど、分布上の根拠に基づいていた。生成変形文法では、更に変形という操作のもとに一単位としてふるまうかが重要な根拠になる。たとえば、しばしば指摘されることだが、英語に動詞句を認めるかを決める際には、次のよう

あるが、最近のチョムスキー理論は、構成素構造の決定に、意味による規準を大幅に持ち込み、形式の体系性、単純性を極度に追求しているように思われる。

これまで文の構造を名詞句や動詞句などの統語範疇の階層構造である句構造としてとらえてきたが、伝統文法および学校文法では、別の観点からの構文分析がおこなわれてきている。それは文の要素を主語、述語動詞、目的語、補語などから分析するものである。これらは統語範疇の文中における機能の面からの分析であり、この両者の関連づけも文法理論の課題の一つである。チョムスキーなどは句構造標識が与えられれば、各機能はその句構造から自動的に導き出せるものとした。たとえば文に直接支配される名詞句を主語、動詞句に支配される名詞句を目的語と定義すればよく、句構造標識に一々機能名を入れ込む必要はないとした。つまり、あくまで統語構造の基本は統語範疇の連鎖であり、主語、目的語などの関係概念ではないと考える。一応その考えに従うことにするが、いろいろと問題が出てくる。たとえば次の文を考えてみよう。

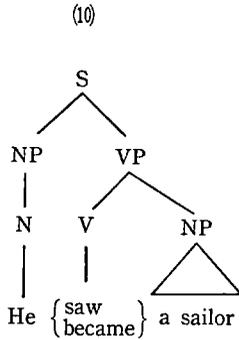
(8) a. He saw a sailor.

b. He became a sailor.

(9) a. He sounded a fool. (彼は馬鹿みただった)<sup>(2)</sup>

b. He sounded a trumpet. (彼はトランペットを吹いた)

(8)にはいかなる句構造が与えられるだろうか。一つの可能性として、a、bともに(10)のような構造をしていると考えられる。



ジャッケンドフ (1977) などがとる立場である。機能の観点からの文型である、いわゆる五文型では  $S+V+O$  と  $S+V+IC$  と区別されているのだが、純粹に統語範疇の階層構造からは区別が付けられないということになる。両者の差は、意味構造の差、すなわち動詞に対する名詞句の意味上の格関係の違いに見出せる。たとえば(8a)

(61) 英語の叙述語句の位置づけをめぐって

⑧ sailor は対象格 (objective) ⑧ sailor は作爲格 (factive) であると言えよう。しかしこの分析には問題があると思う。確かに次の⑪などは、統語構造は同じで意味構造が違う、すなわち、⑪a) の John は動作主格 (agentive) ⑪b) の key は道具格 (instrumental) と言える。

(11) a. John opened the door.

b. The key opened the door.

だが⑧に関しては、⑫のように数の一致の現象が見られることなどからも、統語構造に差があるとすべきであろう。

(12) They became sailors.

⑨に関しても同様である。ともかくこの分析では⑬は同じ構造を持つことになる。

(13) a. He becomes a sailor.

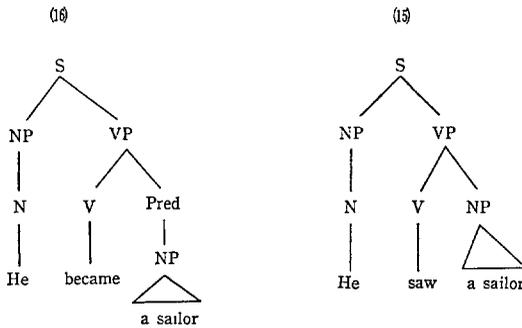
b. The suit becomes you. (そのスーツはあなたに似合う)

これらに構造の違いを出す分析のうちの一つは次のような句構造規則を導入する。

(14) a.  $VP \rightarrow V(\{Pred\})$

b.  $Pred \rightarrow \{AP\}$   
 $\{NP\}$

繫辞の be 動詞や、become, grow などの連結動詞の後に来る要素は Pred (= predicative) という範疇を認める。そうすると⑧a) と⑧b) はそれぞれ⑮、⑯という異なった句構造認識を持つことになる。



問題となるのは、Predとは統語範疇ではなく、NPやAPの機能ではないかという点である。確かに他の統語範疇とは幾分性格を異にするが、繫辞や連結動詞の後に来るといふ分布上の規定ができ、この位置に来る名詞句は、数の一致を初め、他の名詞句とは違った性質<sup>(5)</sup>を示すことなどから、統語論上の範疇ないし素性と認めてよいと思う。Predは補語としての機能とは違い、句の属性を表わすものである。ジャックエンドフはPredを認めるのは動作主 (Agent) という意味標識を句構造の中に認めることと同じだと言っているが、Agentとは性質が異なることは明らかである。先に、主語や目的語は句構造から自動的に決まるので句構造標識の中に書き入れなくてもよいことに触れたが、このPredについては自動的に決まらないのであるから、句構造標識に何らかの形で導入すべきだと思う。Predを認めないと句構造の持つ意味が軽減し、ただ単に意味解釈をする文法になってしまいうように思われる。

しかしPredを認めず、しかも句構造の違いを表わすことも考えられる。ストウエル (1982) がするように (8b) は例のようなより抽象的な構造から変形で導かれたもの

で (8a) とは構造が異なるとする分析もある。

(17) [Δ] became [he a sailor]

これについては後に触れる。

## 二

次に、最近問題になっているとした(1)のタイプの文のこれまでの分析を振り返ってみよう。

まず (1a) のタイプの文から考えてみる。この構文は生成文法において、すでにチョムスキー (1957) で取り上げられていた。ここでは competent を動詞の補足部と考え、(8) のような規則を設けて導入していた。<sup>(6)</sup>

(18) V → V + Comp(lement)

consider competent を動詞十不変化詞からなる複合動詞と同じように見ていた。この見方では、consider と competent が密接な関係にあることは表わしても、John is competent という関係が含まれていることがうまくとらえられないことになる。その後ローゼンバウム (1967) などで補文の研究が進むにつれ、(1a) は次の(19)が基本型であり、それから *is be* が消去されて派生されたものと考えられるようになった。

(19) I consider John to be competent.

この(19)の構文の分析はその後の生成文法の流れを決定することになったと言える程、問題の多いものだが、簡略に言うならば、表層で V NP to VP という同じ型であったも、様々な統語現象から、動詞が a) persuade, force 型' b) believe, consider 型' c) want, prefer 型で別々の基底構造を考えるべきであるとされる。特に問題となるのが(19)のような believe 型の(派生)句構造であり、John が(20)のように動詞の目的語の位置にあるのか、(21)のように、埋め込み文の主語の位置にあると考えるかで意見が別れるのである。

(20) V NP [to VP]

(21) V [NP to VP]

ポースタル (1974) は、従文主語を主文の目的語の位置に移動する変形を認め、表層では(20)のような構造をしていると考える。それに対しチョムスキーは、チョムスキー (1973) 以降一貫して、そのような変形を認めず、(21)のように分析する。そこで問題の(1a)に関しては、ポースタルは(20)から to be が消去された構造であるとして、John は目的語の位置にあると考える。チョムスキーの

(1a) に対する分析がいかなされるかは、はっきりしないところがあった。

その後(1a)は(19)から to be が消去されて出来たと考えることにも疑問が出された。

(22) We named the baby Tom.

(23) You made me happy.

(24) He painted the box red.

(22)~(24)のように to be が使われないことがない文の扱いがまず問題となる。更に(24)で示されるように to be はいつも機械的に消去されうるとは限らないのである。

(25) a. I want John to be president.

b. \*I want John president.

類似の現象として、後に触れる(1b)のタイプとも関連し、(26)と(27)の対比なども挙げられる。

(26) a. John appears to be happy.

b. John appears happy.

(27) a. John happens to be sleepy.

b. \*John happens sleepy.

ハイカー (1979) によると、これらは個々の動詞の特性であり、言語習得上もそれぞれ覚えなくてはならないも

のだとされる。また、ポーキン (1973) は、to be のある型とない型では意味の違いがあることを指摘する。そのない型は、対象を直接的、主観的に評価する場合に使われることが多い。このようなことから (1a) を (9) に直接的に関連付けない方がよいのではないかという流れになった。

(1a) の型の文を分析する際には、二重目的構造との違いも考慮に入れなくてはならない。次の (28)、(29) ともに二つの構造が重なり合っているので二つの意味にとれる。<sup>(6)</sup><sup>(8)</sup>

(28) I found her an entertaining partner.

a、私は彼女に楽しい相手を見つけてやった。

b、私は彼女を楽しい相手だと思った。

(29) He called me a doctor.

a、彼は私に医者を呼んでくれた。

b、彼は私を医者だと思った (先生と呼んだ)。

初期の生成文法では、二重目的構造は (30)、(31) のような、より基本的だとされた直接目的十前置詞句型から変形で導かれると考えられた。

(30) I found an entertaining partner for her.

(31) He called a doctor for me.

つまり、(28)、(29) では、表層で同じ構造をしているとしても基底構造は異なるとして、構造の違い、ひいては意味の違いが表わせると考えられた。かつて形式を重んじるヒル (1968) はこれらの文の構造はまったく同じであり、違いは語彙的意味の違いにすぎないとした。ジャッケンドフ (1977) も同様である。第一節で述べたと同じ理由により、やはり統語構造も違うとする分析をとるべきであろう。ここにも (28) のような数の一致現象などが見られるのである。

(32) I consider them doctors.

意味のわからない動詞が使われている V+NP+NP という連鎖を見た時、我々は、まずどちらの構造であるかを考えるであろう。統語構造に差を認めようとした点では、変形文法のとった方向は正しかったと思われる。しかしその後の研究で、変形という操作で結びつけていた文の関連性のいくつかが疑問視されてきたわけである。(28)、(29) に関しても、その消去を初め、二重目的構造を導くとされた変形は一般性を欠くために認められないという傾向になってきたので、二つの型の区別を別の所に求めなくてはならなくなった。その一つの可能性は表層

も含めた句構造の違いとすることである。

最近の分析を検討する前に、(1b)のタイプの文の分析の問題点を見ておこう。それはいわゆる非人称構文か否かに関係する問題である。seem についでには(33)のような文が重要視される。

(33) There seems (to be) another earthquake.

とついでに there は be 動詞と共起するという統語論上の根拠および意味構造の点から(33)の基底構造は(34)であると考えられる。

(34) [△] seem [there (to be) another earthquake]

(34)に主語上昇変形が適用され(35)が派生することになる。seem, appear についでにはこれではほほうまぐ説明がつかない sound とか look などには、マシモース (1979) も指摘するように事情が異なる。

(35) They sound drunk.

(36) They look drunk.

(37) It sounds as if they are drunk.

(38) It looks as if they are drunk.

(35) (36)はそれぞれ(37) (38)とは意味が異なり、話し手が彼らの声なり表情なりをじかに感じとっている時に使う表

現である。一方、たとえば(38)は(39)のような状況で使えるといわれる。

(39) From what you say, it looks as if they are drunk.

また(40)のような命令文にも使われるので、これらの主語は基底から主語の位置に生成した方がよいと思われる。

(40) Look happy.

to be の付かない seem なども主語上昇変形による説明だけでは不十分のようであり、状況によっては、(40)のような命令文に使えると言うインフォーマントもある。マシモースにとっては(41)も可であるとされる。

(41) I deliberately seemed irritated.

これは look を sound との混成現象であらう。後の論点との関係で強調しておきたいことは、sound, look をはじめ、主語上昇変形を認め難い動詞型が存在するという点である。次のものはその例である。

(42) Harry got drunk.

(43) It tastes nice.

(44) John felt sad.

これらの動詞は統語論上は Pred を取るとしておけばよ

いだろう。

次に例のような型に触れておく。

(45) He arrived sober.

この sober は今までに見たものとは違い付帯状況を表わし副詞的であり、arrive が要求する Pred ではなく。

(46) He stood silent.

(46)は Pred 要求型と例(45)の中間的なもののようである。

### 三

さて(1a)の文に関する最近の分析を見てみよう。(1a)の文が to be 消去によらず、そのままの形で生成されるとした場合、どのような構造を与えることになるのか。問題は John competent が例(47)のように一つの構成素を成しているとするか、(48)のように名詞句と形容詞句の連鎖であると分析するかである。

(47) I [consider [John competent]]

(48) I [consider [John] [competent]]

概念上 John competent は一つの陳述(主語—述語関係)を成すため、かつてイエスベルセンはこれをネクサス目的語として分析したのである。それに従えば John

competent は一つの構成素を成すと考えたくなるが、その形式上の支えで直接的なものはないと言えよう。たとえば(49)・(50)・(51)のように変形することはできない。

(49) \*John competent is considered by me.

(50) \*What I consider is John competent.

(51) \*I consider, but I can't prove, John sick.

グリーン(1973)なども John competent が一つの構成素を成すことを証明するテストは考えられないとして、少なくとも派生構造では名詞句と形容詞句の連鎖であると分析した。最近でもウイリアムズ(1983)などはそのように分析する。しかしストウエル(1981, 1983)・サフラー(1983)・チョムスキー(1981)などは一構成素説をとる。そこで、そう分析することの利点、問題点などを検討してみよう。

ストウエル、サフラーは一応形式上の支えを見出そうとしているが、これも直接的なものではない。次の(52)が問題の文である。

(52) Workers angry about the pay is just the situation that the ad campaign was designed to avoid.

これはすでにイエスベルセン (1940) が、主語、述語位置に現われるネクサスがあると指摘していたことである。<sup>(10)</sup> 主語位置に現われるものは通常構成素であるから、(52)の workers angry about the pay も一構成素と考えられる。すると (1a) の John competent も一構成素を成すと考えることができるはずだという論理である。しかし (52) を認めないインフォーマントもあり、あまり強い根拠にはならないように思われる。

チョムスキー (1981) は別の観点から一構成素説をとる。最近のチョムスキーは辞書部門で規定される下位範疇化 (動詞が NP や S など、どのような範疇を補部として取るかの規定) と主題役割付与 (動詞の要求する項に、agent や patient など、どのような主題役割を付与するかの規定) は D 構造<sup>(11)</sup> から S 構造、論理形式に至るまですべて同じ形式が投射されるという投射の原則 (Projection Principle) との規準 (criterion) を打ち出している。この考え方に従えば、consider は名詞句か節 (陳述) を取ると考えられるので論理形式にいたるまで John competent が一つの節であるという形式が与えられなくては都合が悪いのである。(53) の b 1 f はすべて

John considers clause という形式をしていると考える。<sup>(15)</sup>

- (53) John considers
- |  |                      |   |
|--|----------------------|---|
|  | the problem          | a |
|  | that S               | b |
|  | Bill to be foolish   | c |
|  | Bill foolish         | d |
|  | it impossible that S | e |

この原則により (48) のような分析は認められないことになる。この原則は純粹に形式上の証拠、つまり交換可能性や、ある変形のもとで一単位としてふるまうかどうかによって句構造を決定するのではなく、概念上の考慮を優先させてしまっており大いに問題であるが、結局このような原則を導入しないと、統語論上の証拠だけでは決着が付かないと考えたのであろう。このような考え方は、文法で決まる意味関係が規定される論理形式というレベルを重視し、それを統語構造と直接的に結びつけようとするところからきており、イエスベルセンのネクサスの考え方とだいぶ似ていると言えよう。しかし論理構造と実際の統語構造はそれほどきれいに対応するものではない。チョムスキー自身 (54) のような文を (55a) と分析すべきか (55b) とすべきか決定する際にその点を認めている。

(34) John regards Bill as foolish.

(35) a. John regards Bill as [NP foolish]

b. John regards [Bill as foolish]

概念上は regard も陳述を取るとして<sup>(55b)</sup>の分析がよいと思われる。実際<sup>(56a)</sup>はそれを支持するが、節構造であれば可能だと思われる<sup>(56b)</sup>、<sup>(56c)</sup>が受け入れにくいことは説明できな<sup>(56)</sup>としてゐる。

(56) a. I regard it as obvious that he will win.

b. ?\*I regard there as being many reasons to continue with our efforts.

c. ?\*I regard too much as having been made of his failure.

このように先の原則は、構文分析の際の作業仮説としてはおもしろいものだが、いろいろな難点に突き当ること予想がつく。

チョムスキーは更に、論理上一単位としたものが、形式上は一単位としてふるまっていまいように思われる<sup>(57)</sup>などは、実は BIII に文法上の格が与えられないからそのような位置に現われな<sup>(58)</sup>に過ぎず、一単位でないことの反例にはならないことを<sup>(59)</sup>のような格理論を立てて説

明し、彼の理論を強化する。

(57) \*What John considers is Bill to be foolish.

<sup>(58)</sup> 格を持たない音形を持つ名詞句を含む文は非文とする。

さてチョムスキーの考え方には問題があるとしても、意味の面からサファアが指摘している事実は興味深い。<sup>(59)</sup>は多義文である。

(59) I believed John sober.

a' 私はしらふの時のジョンを信じた。

b' 私はしらふでジョンを信じた。

c' 私はジョンがしらふだと信じた。

この多義性の一面は、チョムスキーのように believe は名詞句と節を取るとすると説明がつく。<sup>(60)</sup>のそれぞれの意味は<sup>(60)</sup>のそれぞれの構造の違いだと考えられる。

(60) a. I [VP [VP<sub>i</sub> believed John [PRO sober]]]

b. I [VP [VP<sub>i</sub> believed John]] [PRO sober]]

c. I [VP [VP<sub>i</sub> believed [John sober]]]

a と b の差はチョムスキー理論では説明されないが、<sup>(61)</sup>が b に対応する意味しか持たず、a の sober が do so の外に起こりえない<sup>(62)</sup>ことで決定される。

(61) I believed John drunk, but Bill did so sober.

(私は酔ってジョンを信じたが、ビルはしらま  
で信じた)

c の読みに対する John sober を一構成素でないとする  
と、a、b、c の違いは句構造以外の別の観点から説明  
されなくてはならない。それも可能であると思うが、句  
構造での説明ほどエレガントにはいかないであろう。ハ  
リデー (1967) が説明している (62)、(63) における意味の違  
いも句構造の違いで説明できると思う。

(62) a. He found her unconscious. (彼が彼女を見つ

けた時、彼女は意識不明だった)

b. He found her attractive. (彼は彼女が魅力的

だと思った)

(63) She made the tea weak.

a、彼女はお茶を薄く入れた。

b、彼女は (お湯をついで) お茶を薄くした。

それぞれ b の方が、一構成素を成す構造である。これら  
の事実に関する限り (1a) の John competent は一単位だ  
とした方がよいように思う。そうすることに「なり、(1a) と  
(64) は別の構造であることがはっきりするのだ。」<sup>(19)</sup>

(64) I ate the meat raw.

(1a) の John competent が一構成素たとしてもそれに  
どのような統語範疇を与えるかという問題が残っている。  
最近のチャムスキーは節ないし文を (6) のように分析する。

(65) a. S → COMP S

b. S → NP INFL VP, where INFL = [H Ten-  
se], (AGR)] (COMP = 補文標識、AGR = 人称  
数、性の素性の束)

そして consider の取る要素は小節 (small clause) すな  
わち INFL も繫辞も持たない、最大範疇でない節構  
造であると考ええる。(6) のようなものであると思われる。

(66) S → NP  $\left\{ \begin{array}{l} \text{AP} \\ \text{NP} \\ \text{PP} \end{array} \right\}$

where John competent を一単位とみることで統語論  
上の規則性も表わせればよいわけだが、チャムスキーは  
彼の理論上そういう規則性があるとする。それは (6) のよ  
うな文の非文法性が彼の統率・束縛理論の中で原理上説  
明されるといふ点である。

(67) \*John considers [s PRO competent] (→

\*John considers competent)

ここでは統率・束縛理論には立ち入らないが、(67)に関して問題になることは、いわゆる意味上の主語を表わす、音形を持たない代名詞的要素 PRO は、彼の理論では統率<sup>(20)</sup>されてはならないという定理があり、consider が取る補文が最大範疇SではなくSであるとすると、PRO は consider によって統率されてしまい、定理に反するので非文となるということである。

しかしチ ム スキーはこの補文を小節Sとみる考え方にも問題があるところがある。

(68) They consider [John the best candidate]

(69) \*They prefer [John the best candidate]

(68)、(69)で見られるように下位範疇化の違いがうまく説明できないというのだ。動詞が小節Sを取るとしたただけでは NP NP という連鎖が可か不可かわからない。そこが考えられたのがストウエルによる(70)のような構造である。

(70) I consider [ap John [a happy]]

これは奇妙な分析である。consider が形容詞句をとるといいう下位範疇化があることになる。この分析は又理論と関係がある。

又理論は NP, VP, AP など各統語範疇間の共通性をとらえようとするものである。そして共通の階層性を表わすために(71)のような規則を導入する。

(71) a.  $X \rightarrow [Spec\ of\ X]X$

b.  $X \rightarrow X \dots$

チ ム スキー (1970) は(72)と(73)の対応関係がそれほど一般的でないとして、(72)を(73)から変形で導かず、基底で直接生成する立場をとった。

(72) John's refusal of the offer

(73) John refuses the offer.

そのために彼は、Nの指定辞 (Specifier) にあたるものを主語とみることで、John's は refusal of the offer の主語であるという関係を表わし、(72)との共通性を示そうとした。主語—述語の関係を文だけでなく名詞句内にも認めたために、あらゆる句が主語を持つとする可能性を開き、更にそれを押し進め文自体が又の型式でVなり INFLの最大投射としての内心構造であり、主語のNPはその指定辞だとみる又の体系性を重視する見方が出てきたのだ。ストウエルは文の構造を(74)のようなものとしてとらえる。

(74) [NP [I INFL-VP]]

このようにして指定辞の位置にあるものが主語であると一義的にとらえられるため、(70)のように分析すれば形容詞句の中で John が主語であることが示せるのである。

そして(70)のような形容詞句が動詞や前置詞の目的の位置にしか現われないことは、チムスキーの格理論で説明するのだ。統率の定義のし方の違いなどからストウエルは AP, PP などを自由に統率を許す範疇とみているが、チムスキーは最大範疇は統率を許さないと考えるため(70)の AP は最大範疇ではないとして A\* という記号で示すなど、細部においては相違が見られるが、いずれにせよこのような句構造は問題である。特に、ワイリアムズ(1983)も指摘しているが、(70)のような場合が問題となる。

(75) John considers [N\* Bill [NP Bob's friend]]

二つの主語を持つ名詞句の内部構造がよくわからないう。

ともかくこのように分析すると下位範疇化ははきりと規定できるといふ利点はある。consider は AP も NP も取るが、prefer は NP を取らなうとどういふことが辞書に指定できる。しかし論理形式で、AP, PP も S の他に陳述(主語―述語関係)を表わすと規定しなくして

はならないことになる。更にチムスキーは小節 S も(70)のような場合に認めているのだ。

(76) John [left the room] [s PRO empty]

(77) John [left the room] [s PRO angry]

(76)、(77)はチムスキーの PRO の生起環境指定理論の弱さを露呈する。長谷川(1983)でも指摘されているように、(76)、(77)は do so テストから、それぞれ先に見た(60a)、(60b)に対応する構造をしていると思われる。すると(76)の PRO は動詞に統率されて非文を予測させてしまう。ストウエルも考えたように動詞の下位範疇化に関わっている句にのみ PRO 主語は現われないとした場合には次の点を指摘しなければならない。つまり最少の動詞句に支配されている要素がすべて下位範疇化に関与するわけではないという点である。

(78) He always drinks coffee hot.

(79) John painted the box red.

(78)の empty、(78)の hot、(79)の red はともに省略可能で、動詞の下位範疇化には関与してはいないと思われるが、句構造上は do so テストから最少の動詞句に支配されていることがわかる。ストウエルは(78)と(79)を別構造と考え

ているようだが、統語論上は同じ構造とみなしてよいと  
 思う。<sup>(21)</sup>

(1b) のタイプの文の分析に関連するが、ストウエルにと  
 って(80)のようなのが一番問題になると思う。

(80) That chair looks elegant.

(81) のような構造は許されないとするわけだから、主語上  
 昇変形で扱うしかないことになる。

(81) That chair looks [PRO elegant]

ストウエルは(82)も主語上昇変形で導くと考えている。

(82) John feels cold.

これらを変形で導くことの問題点は第二節で触れたとお  
 りである。また第一節の(17)のような分析もしているが、  
 そのように分析しなければならぬ統語論上の根拠は弱  
 いように思う。すべて(17)との差を出すための操作である。

以上から理解されるように、一構成素説は意味の区別  
 が句構造標識に反映され魅力あるものだが、その統語範  
 疇および PRO の生起環境指定には問題があると言え  
 る。以下では一構成素とみない理論のうちの一つを簡単  
 に検討してみよう。

ウイリアムズ (1980, 1983) は意味にまとまりがあっ

ても統語論上は構成素を成すとは限らないと考える。節  
 を基本的と考えるチョムスキーに対して、彼は主語―述  
 語関係を基本とし、節はその一つの具現化にすぎないと  
 する。この考え方は傾聴に値するものだと思うが、実際  
 の分析はそれほど鮮やかなものではないと思う。彼は句  
 構造に従って主語と述語に同じ指標を与えていく。(1a) タ  
 イプの文には(83)のような指標が与えられることになる。

(83) John<sub>i</sub> [considers<sub>i</sub> [Bill]<sub>NPj</sub> [sick]<sub>APj</sub>]<sub>VPz</sub>

句構造を見ただけで何が述語であるかが自動的に決まら  
 ばすっきりした記述ができるであろう。(84)の斜字体の句  
 は同じ指標を与えるように指示をしておく。

(84) a. NP VP

b. NP VP X

c. NP be X

しかし述語が動詞句の中にある場合で、またそれが名詞  
 句の場合は、目的語なのか述語なのか、句構造で差を出  
 していないのでわからず、結局は動詞が、どれが述語な  
 のかの指示を出すとしている。<sup>(22)</sup> これは第一節で見たよう  
 な Pred という統語範疇(素性)を認めているのと同じ  
 ことになると思う。指票付与にはいろいろと難点がある

が、一構成素説との説明の違いは、先に触れた(8)の多義性の分析であろう。ウィリアムズにとって例の a と c の意味の違いは、句構造の違いから来るものでも、指標の与え方の違いによるものでもないだろう。どちらも(8)のような句構造と指標が与えられるはずである。

(85) I<sub>i</sub> [believed]<sub>v</sub> [John]<sub>NP</sub> [sober]<sub>AP</sub> [VP]

意味の差は believe が取る項 (argument) の違いで説明されることになろう。John が believe の項である時間が a の意味になる。つまり believe が John に主題格を与えるか否かという意味構造の違いになる。この違いが句構造に現われないのはどうも不自然な気がする。彼の主一述の指標付与は、命題を表わす主語一述語関係と、ただ叙述的な場合との区別をつけたいことも気になる。一構成素説の方が分があるようだ。

最後に、リビエール (1982) が指摘する(86)、(87)などに触れておく。

(86) a. They drank him under the table.

b. He drank himself senseless.

(87) a. He laughed himself sick.

b. The audience laughed the actors off the stage.

これらは下位範疇化や選択制限を破るような例であり、結果を表わす小節を取るとした方がうまく記述できると思う。

以上の考察から、私は一応、問題の連鎖は(8)のような小節構造と考えておく。

(88) S → NP Pred, Pred →  $\left\{ \begin{array}{l} AP \\ NP \\ PP \end{array} \right\}$

#### 四

文法記述は形式的側面と意味的側面のバランスをとって行われなくてはならない。句構造は意味と形式の接点のようなものだろう。おもしろいことに、意味を重視することは句構造の内容を豊富にすることもあるし、貧弱にすることもある。句構造を意味を表わすレベルと結びつけるか、それとは独立したものとみなすか両方考えられるからだ。そもそもは又理論による体系性を重視し、Pred は意味機能を表わすものとして排除したことにより、様々な方向に可能性が広がったとみることもできよう。句構造は単純な形式だけを表わすとする解釈文法が登場する。チャムスキーの立場は屈折していて、意味を

重視し句構造と結びつけることにより句構造の体系性を追求し、すべての句には主語があるとするとするストウエルの説を受け入れた感がある。あまりに又理論を重視することは差し控えたい。形式を重視しつつ意味の差が表わされるようなものとして句構造というレベルを考えたい。問題の構造に関しては今までに論議されていることから一構成素とみた方がよいように思われるが、句構造の限界ということも新たな観点から考える必要があろう。たとえばマシューズが指摘するように *consider* と *content* の間にも依存関係が存在するのであり、先に触れたようにチョムスキー自身もかつてそう分析していたし、今でも *tough* 構文との関係でそのような分析の可能性を示唆している。また、線上下つながっている *consider* と *John* の間にも何らかの関係はあるだろう。同時に起こる依存関係は句構造では表わせないのだ。

以上、英語の叙述語句の位置づけをめぐる最近の研究を検討したが、*Prod* という範疇ないし素性は必要であるように思われる。

(1) 句構造には多義性の説明だけでなく、その階層性に基づいて代名詞と先行詞の関係などを規定できる重要な面も

ある。

- (2) 特にアメリカ英語では *sound* の補語に名詞句を認めないことが多い。この例文はマシューズ (1981) より。
- (3) フィルモア (1968) の用語を使った。ジャッケンドフは *Identificational Location* という表示をする。
- (4) チョムスキー (1965) はほぼこのような分析をした。
- (5) たとえばフィルモア (1968) は (i) のように普通なら形容詞が受けるような修飾を受けることがある点を指摘する。
  - (1) *John is quite an idiot.*
- (6) ウィッサー (1970) も同様な分析をする。
- (7) 以下\*は非文を表わす。
- (8) もちろん動詞の意味も異つていと言えよう。
- (9) 例文はクワーク他 (1972) より。
- (10) イェスベルセンは動詞が *make* である場合も挙げているが、サファー、ストウエル共に動詞は *be* に限るとしている。
- (11) 移動変形を受ける前の構造で、主題役割 (*θ-role*) が決るレベル。
- (12) 移動変形を受けた後のレベルで痕跡 (*trace*) を含む。
- (13) 意味表示のレベル。
- (14) 動詞の取る項は必ず一つの主題役割を担い、各主題役割は一つの項にのみ与えられるとするもの。
- (15) *c* と *e* の意味の違いをどのように表わすのかははっきりしない。

- (16) Tense (orAGR) に統率 (Govern) を持つ *do so* nom-inative, 他動詞に統率されて *do so* objective 前置詞に統率されて *do so* oblique になる。
- (17) *do so* の外に出られないものは最少の動詞句 VP<sup>1</sup> に支配されている。
- (18) ホリデーは触れていながらこの文にも「彼女が意識不明だとわかった」という意味もあるらしい。
- (19) (64) は (60b) に当る構造をこじごると思う。なまこイロメンパンは the meat raw をメインサマ目的語とこじごるといえるがチョムスキーと違う。
- (20) 「AがBを統率する」の定義。  
 (i) A=X<sup>0</sup> (＝語彙範疇 'N', 'V', 'A', 'P')  
 (ii) AがBをc-統御している。  
 (iii) Bを支配する任意の最大範疇 (S, NP, VP, AP, G) ように同一タイプの句のうちの最大のφのAをφ支配している。  
 「AがBをc-統御している」の定義。  
 AはBを支配せず、Aを支配する最初の(枝分かれ)節点でBを支配する。
- (21) もちろん意味の関係の違いを規定する規則は必要になる。
- (22) 二重目的構造の分析の一つとしてチョムスキーは(1)のようなのを考えている。

- (1) John [VP [V gave Bill] a book]  
 (23) 述語と指定されたφの意味上の概念である主題 (Theme) は主語にならずに説明している。

引用文献

- Baker, C. L. (1979) "Syntactic Theory and the Projection Problem," *Linguistic Inquiry*, Vol. 10, No. 4.
- Borkin, A. (1973) "To Be and Not To Be," *Papers from the Ninth Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*.
- Chomsky, N. (1957) *Syntactic Structures*. Mouton.
- (1965) *Aspects of the Theory of Syntax*. MIT Press.
- (1973) "Conditions on Transformations," in S. R. Anderson and P. Kiparsky (eds.), *A Festschrift for Morris Halle*, Holt, Rinehart, and Winston.
- (1981) *Lectures on Government and Binding*. Foris.
- Fillmore, C. J. (1968) "The Case for Case," in E. Bach and R. T. Harms (eds.), *Universals in Linguistic Theory*, Holt, Rinehart and Winston.
- Green, G. (1973) "A Syntactic Syncretism in English and French," in B. Kachru et al. (eds.), *Issues in Linguistics*. University of Illinois Press.

Halliday, M. A. K. (1967) "Notes on Transitivity and Theme in English, Part I," *Journal of Linguistics*, Vol. 3, No. 1.

長谷川欣祐 (1983) 「文法の整理——基礎語彙の整理」『純語』1983年~1984年

Hill, A. A. (1958) *Introduction to Linguistic Structures*, Harcourt Brace.

Jackendoff, R. (1977) *X Syntax: A Study of Phrase Structure*, MIT Press.

Jespersen, O. (1940) *A Modern English Grammar*, Part V, George Allen & Unwin.

Matthews, P. H. (1979) "Complex Intransitive Constructions," in S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik (eds.), *Studies in English Linguistics for Randolph Quirk*, Longman.

——— (1981) *Syntax*, Cambridge Univ. Press.

Postal, P. M. (1974) *On Raising*, MIT Press.

Quirk, R. et al (eds.) (1972) *A Grammar of Contemporary English*, Cambridge Univ. Press.

——— *vary English*, Longman.

Rivière, C. (1982) "Objectonable Objects," *Linguistic Inquiry*, Vol 13, No. 4.

Rosenbaum, P. S. (1967) *The Grammar of English Predicate Complement Constructions*, MIT Press.

Safir, K. (1983) "On Small Clauses as Constituents," *Linguistic Inquiry*, Vol 14, No. 4.

Stowell, T. (1981) *Origins of Phrase Structure*, unpublished Ph. D. dissertation, M.I.T.

——— (1983) "Subjects Across Categories," *The Linguistic Review*, Vol 2, No. 3.

Visser, F. Th. (1970) *An Historical Syntax of the English Language*, Part I, E. J. Brill.

Williams, E. (1980) "Predication," *Linguistic Inquiry*, Vol. 11, No. 1.

——— (1983) "Against Small Clauses," *Linguistic Inquiry*, Vol. 14, No. 2.

(1雜誌總一)